

『風と共に去りぬ』再読 —アイルランドのコンテクストから—

佐藤 郁*

『風と共に去りぬ』(*Gone with the Wind*, 1936)は、南北戦争(1861-1865)時代のアメリカ南部を舞台に、波瀾万丈の人生を送るヒロイン、スカーレット・オハラと悪漢レット・バトラーが繰り広げるロマンス物語である。我が国に限らず、この作品を原作ではなく映画を通して親しんだ人が多いだろう。¹⁾この長編大作が、興業的に上映可能な数時間の映画に映画化されるにあたって、原作に色濃く描かれたアイルランド性はほとんど割愛されてしまった。この作品がアイルランド移民の二世の物語であることがあまり知られていないのは、そのためである。アイルランドの血をひく原作者ミッチェルは、スカーレットの父ジェラルドを、21歳のとき着の身着のまま渡米してきたアイルランド移民として描いている。彼のいかにもアイルランド人らしい気性や土地への執着心は、長女スカーレットに受け継がれ、彼らの土地に対する思い入れこそ、この作品の基調となっている。スカーレットのさまざまな言動には、父から継いだアイルランド人の血によって起こされたと思われるものが多く、この作品はアイルランド性抜きにしては成立しえないものなのである。

そこで本稿では、『風と共に去りぬ』に見られるアイルランド性について、アイルランドの移民や植民地経験といったコンテクストから考察してみたい。

《アイルランド移民とアメリカ》

今やその出自をアイルランド系と答えるアメリカ人は4千万人にのぼっており、エスニック・グループとしては多数派となっている。だが、彼らの祖先にはやむを得ず故国を離れてきた者が少なくない。アイルランドから北米大陸への移民の歴史は、17世紀にさかのぼることができる。17世紀の一世紀間にすでに約5万から10万のアイルランド人がアメリカへ渡った。その多くはサトウキビやタバコ栽培に従事する年季奉公人で、その他、犯罪者などがいた。しかし、年季奉公人は年季が明けるとアイルランドに帰ることが多く、アメリカを定住地として考えるものはまだ少なかった。

18世紀になるといわゆる「新天地」を求めての移民が大半となった。この世紀の特徴は、その移民のほとんどが前の世紀にスコットランドからやって来たアイルランド人であり、プレスビテリアン(プロテスタントの長老派教会)の信仰者であったことである。17世紀末に結ばれたリムリック条約によってアイルランドでは英国国教会が唯一の合法教会とされ、カトリックのみならずプレスビテリアン信仰も禁止された。政府の政策によってスコットランドから渡ってきた彼らは、アイル

*東洋大学国際地域学部; Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

ランドでも高い税金や宗教的迫害に苦しめられ、さらに海を渡ってアメリカへと移住していったのである。この世紀には約50万人が移住したと考えられている。

アイルランド移民というと、カトリック系の移民を指すことが多いが、カトリックの移民が増えたのは19世紀以降のことである。これは人口増加やカトリック刑罰法に起因する庶民の窮乏によるところが大きい。さらに、100万人が死に100万人が国を捨てたと言われている1845—50年の大飢饉は移住に拍車をかけ、以後現在に至るまで、約550万人がアメリカへ渡ったとされている。

『風と共に去りぬ』の作者マーガレット・マナリン・ミッチェル（1900-1949）の母方の曾祖父フィリップ・フィッツジェラルド（1798—1880）もまた、アイルランド移民の一人であった。彼は1825年、現在のアイルランド共和国のティペラリー州から渡米、やがてジョージア州クレイトン郡のジョーンズボロ近くに農園を所有した。カトリック教徒は差別を受けていた時代であったが、彼はその「不屈にして素直」²⁾な人柄によって、後には州議会議員を務めるまでの名士となった。ミッチェルは少女時代、この農園を度々訪れ、そこに住んでいた祖母の妹たちなどから、フィッツジェラルド家の歴史をくわしく聞かされた。特に、シスという大叔母の見事な語り口に、ミッチェルは魅了されたという。ミッチェルの父はスコットランド系アメリカ人であり、プロテスタントであったが、母親と祖母アニーはともに熱心なカトリック教徒であった。³⁾ ミッチェルはこの二人の女性の影響を強く受け、アイルランドの血筋を自身のなかに強く感じていたし、また、周囲にも彼女をそう見る人達がいた。このように、アイルランド色の濃い出自であり、またそのような環境に育ったことは、ミッチェルが『風と共に去りぬ』を創作するうえで重要な基盤となった。

《アイルランドの土地収奪の歴史》

『風と共に去りぬ』において、スカーレットの父ジェラルド・オハラがアイルランドより渡米してきたのは、1822年のことと計算される。彼は、不在地主の地代取り立て人のオレンジ党員をけんかのあげく殺害、わずか2シリングの金を握って、夜も明けぬうちに故郷の村を離れたという設定になっている。作品の中のオハラ家のみならず、アイルランドの民衆を長い間苦しめたこの不在地主制度とはいったどのようなものであったのか。アイルランドの土地は民衆とともに侵略と支配の歴史下におかれてきたが、ここでは、カトリック解放令（1829年）を迎えるまでの変遷をたどってみたい。

1. ケルト共産制と封建制

アイルランドの土地をイギリスが所有するようになったのはいつか。そもそも古代アイルランドにおいては、土地の個人所有という概念が存在していなかった。古代アイルランドは六つの基本的階層から成る階級社会であったが、土地は共同体としての氏族の共有物であり、氏族員はその一部を与えられて労働したり、耕作をおこなったりしていた。彼らは氏族の土地を保有はできても、それを売ったり相続したりすることはできず、死後は再び共同体に返す仕組みになっていた。また、完全に氏族全員の共同所有である肥えた土地もあれば、貧しい者や老人のためにとってある土地も

あった。人々は共同で土地を耕し、生産物は労働者の間で分配された。このような制度は、19世紀までアイルランドの一部の農村に残っていたという。

やがて、デーン人との戦いを通じての非ケルト的なものとの接触、また、ローマ的封建制度を支持するケルト教会などによって、世襲制という個人を優先させる制度や、土地の個人所有という考え方がアイルランド社会に浸透していった。こうして徐々に、支配者階級にあった者や教会は土地を自分のものと主張し、相続し、自由に譲渡するようになっていったのである。

5世紀にアイルランドにキリスト教を布教した聖パトリックは、この国の守護聖人として国民から敬愛されているが、実際には、11世紀頃まで、アイルランド人の大部分はカトリック教会の教義を受け入れていなかった。民族の土着の慣習を不信仰で野蛮と感じていた教会は、自分たちの教会及び民族の欠点や遅れた状況が改善されることを願っていた。12世紀、アイルランドにおける大王位抗争が発端となって、アングロ＝ノルマン人の侵入が始まり、土地を次々と収奪していったとき、より厳格な封建制度と教会制度が導入されることを望んだ教会は、彼らの暴挙にも目をつぶったのである。1171年イングランド国王ヘンリー2世がアイルランドの宗主となり、多くのアイルランド首長が彼に降伏、その後今世紀まで続いたイングランド、イギリスの支配が始まった。

しかし、この世紀にアイルランドに渡ったノルマンの貴族は、その後アイルランドの民族性に同化してしまい、16世紀までは依然としてケルトの共産制と封建制が併存していたのだった。

2. 植民と土地収奪

イングランドはアイルランドを完全に支配下におくために、行政、服装、言語、生活習慣の面にいたるまで徹底的にイングランド化することを目指した。そのためにとられた方法が16世紀後半以降の植民であった。この植民によって、アイルランドにおける土地所有の制度の性格は変わっていくこととなる。イングランド政府は、入植に反対して蜂起した者たちの土地を没収したり、法を改定したりして土地を没収し、それを入植者に貸し与え、入植者たちはアイルランド人を小作人として雇うようになっていった。イングランドは、言語や生活習慣を変えさせると同時にカトリックの教会を英国国教会のものとして没収したが、民衆の改宗にはそれほど積極的ではなかったという。それは、支配者＝プロテスタント、非支配者＝カトリックという構図が、イングランド政府にとってかえって都合のよい点が多かったからであった。

19世紀までのアイルランドの土地収奪と植民地支配の歴史において、後々までも暗い影を落とした人物として、オリバー・クロムウェルとオレンジ公ウィリアムの二人を挙げておく必要がある。

1649年、各地で度々起きるようになっていたカトリックの蜂起によって被害を受けた植民者のかたきをうつため、クロムウェルは2万の兵を率いてアイルランドに乗り込んだ。ドロエダにおける住民の大虐殺、ウェックスフォードにおける2千名の処刑は、後世にまで語り継がれる大惨事となった。反乱に参加して生き残った者のうち約3万人が大陸へ逃がれ、こうして没収された土地は、イングランド政府の債権者や相場師や将校らに与えられた。所有する土地に地主が住まない不在地主制は、すでに13、4世紀頃から存在していた。しかし、この世紀においては、今述べたような出来事

を経て、土地が支配者階級のプロテスタントの不在地主の確実な収入源、投機の対象へと性格を大きく変えたのである。

1685年、カトリックのジェームズ2世がイングランド国王に即位すると、アイルランドのカトリックはあらためて土地処分の変更とカトリック教会の容認とを強く望んだ。勢力を強めつつあったカトリックに危機感をつのらせたプロテスタントは、王の娘婿でプロテスタントのオレンジ公ウィリアムをかつぎ、義父である王を追放させた。ジェームズはフランス軍を援軍として率いてアイルランドに逃げ込み、ウィリアム3世（オレンジ公ウィリアム）軍とボイン川で激突（1690年）、ジェームズ側が敗退した。戦いは翌年までつづき、ジェームズ側についていたアイルランド軍はリムリックまで後退を余儀なくされ、ついにリムリック条約に署名した。この条約は、カトリックにとって Cromwell の時ほど厳しいものではなかったが、それでも多くの兵士が大陸へ逃れ、土地や財産が没収された。このような経過を経て、カトリックがアイルランド全島において所有していた土地は、1641年時点で59%だったのが1688年には22%、1703年には14%にまで減少したのである。

3. 刑罰法の時代と不在地主制の悲劇

リムリック条約以降、カトリックに対する新しい刑罰法が、次々と議会を通過した。その目的はアイルランドにおけるカトリックの信仰の根絶であったが、実際には宗教的な礼拝に対する刑罰はほとんど実施されず、もっぱら職業の規制において施行された。しかし、18世紀におけるアイルランドの悲劇は、この刑罰法よりも、不在地主制にあった。不在地主の多くはロンドン、パリ、ダブリンなどの都会に住み、仲介人（地代取り立て人）から定期的に収入を確保していた。仲介人は土地を細分して短期契約で小作人に又貸しした。人口が急増し、貧困や病気、犯罪が広がったこの時代、耕作する土地を確保できるかどうかは農民にとって生死にかかわる重要な問題となり、激しい競争が起きた。ここにつけこんだ仲介人は、しばしば地代を上げ、貪欲に、残酷に取り立てをおこない、姿の見えない地主以上に、小作人にとっては憎むべき暴君となったのだ。

『風と共に去りぬ』のジェラルド・オハラがけんかのあけく殺してしまったのも、この仲介人である。しかも、その仲介人は、1795年につくられたオレンジ党の人間でもあった。オレンジ党とは、プロテスタントが、プロテスタント優位の体制を守るためにつくった組織であり、その名はアイルランドのカトリックが憎むオレンジ公ウィリアムにちなんだものである。

18世紀末までにはその多くが廃止されていたカトリック刑罰法であったが、弁護士であった政治家ダニエル・オコンネル（1775—1847）の活躍によって、1829年、ついにカトリック解放法が成立する。これによりオコンネルはアイルランド民衆の英雄となる。1840年代、オコンネルは彼の生涯における第二の大運動——アイルランドとブリテン（イギリス）との併合を廃止する運動——を開始した。彼は、リピール（併合法撤廃）協会という組織をつくり、この運動の特徴となった大集会を開始した。1843年、100万の人が集った場所、それがタラであった。

《タラ》

『風と共に去りぬ』でミース州出身のジェラルド・オハラがアメリカに渡り、裸一貫で築き上げた農園はタラと名付けられている。タラとはアイルランド共和国ミース州にあるなだらかな丘陵地の名であり、古代においては大王（high king）座がおかれていた象徴的な場所である。アイルランド問題研究家の松尾太郎氏は次のように述べている。

ニューグレンジにほど近いタラ丘陵は、三世紀ごろにゲール諸部族の上にたった上王の砦の遺跡によって、アイルランド人の心のふるさととなっているところである。タラの丘から望める肥沃な平野の広がり、いにしへの「くに」の広がり想像させるものがある。⁴⁾

創作の過程でミッチェルはこの農園の名を決めるために聖書やアイルランド関連の文献に目を通したという。つまりミッチェルは、「タラ」が主人公スカーレットにとって、神聖にして「心のふるさと」となる場所であると考え、それにふさわしい名を探したのである。その通り、この作品においては、このタラ農園こそが、第二の主人公といってもいいほどの役割を果たしている。

スカーレットにとって、タラ農園は生まれ育ったなつかしいわが家以上のもの、つまり、南北戦争によって破壊される以前の幸福な日々象徴にほかならない。決して他人によって踏みにじられたくない場所であり、苦しいとき、悲しいときに必ず心が帰っていく「心のふるさと」だった。

しかし、タラ農園のもつ意味はそれだけではない。そこには、アイルランド人による土地への執着心がある。侵略と支配の歴史下に長くおかれ、自分自身の土地を庶民が持たなくなつて久しいアイルランドの人々にとっては、ジェラルドが娘に話して聞かせたように、「土地こそはこの世でいつまでも存在するただひとつのもの……そのために働く価値のあるただひとつのもの、闘い、死するに値するもの」(36)、「一滴でもアイルランド人の血をひく者にとって、自分の住む土地は母と同じ」(同)なのである。ジェラルドが農園を築いたのも、祖先から受け継いだ土地への「深い渴望」(45)からであった、と作者は書く。⁵⁾

『風と共に去りぬ』でジェラルドやスカーレットにおいて描かれるタラへの執着は、彼らの祖先の土地への執着心、支配者や侵略者に対する怨念であり、やむを得ずアイルランドから他国へ渡って行った移民たちの母国への執着心そのものと言っていいだろう。

陥落寸前のアトランタから命からがらタラへ逃げ帰ってきたスカーレットは、母の死や、北軍に荒らされた屋敷に愕然とし、呆然自失の父から事の次第を聞き出そうとする。北軍に脅されながらも屋敷に居座りつづけたことをつらそうに話す父を見てスカーレットは「無数のアイルランドの先祖たちがジェラルドの肩の後ろに群がって」(411)、タラから逃げ出すことを父にゆるさなかったのだと悟る。それは、「自分たちが生活し、耕作し、愛し、子供を生んだ家を見捨てるぐらいなら、最後まで戦って、わずかな土地の上で死んでいった者たち」(同)のまぼろしであった。その晩、久しぶりのわが家で床に就くスカーレットの頭に、子供のころから意味もわからないまま何度となく聞

かされた、家に伝わる話がよみがえる。

そこには、アイルランドの自由のためにアイルランド義勇軍とともに戦って空しく絞首刑に処せられたスカーレット家の先祖たちもいれば、自らの財産を守るために最後まで戦ってポイン川で死んだオハラ家の祖先たちもいた。⁶⁾

みな致命的な不幸に苦しめられたが、その非運に押しつぶされることはなかった。(中略)彼らは泣き声をあげず、彼らは戦った。(中略)それらの人たちのまぼろしと同じ血が彼女の血管にも流れていたが、そのまぼろしが月光に照らされた部屋をしずかに動きまわっているように思われた。(中略)タラこそ彼女の運命であり、戦場であり、彼女はそれを征服しなければならなかった。

(420-421)

スカーレットは先祖たちに激励されているような気持ちになり、「ありがとう」とつぶやきながら眠りに落ちていく。ここでスカーレットは、遠いアイルランドやフランスの先祖たちとのつながりを初めて自覚するのである。彼女はそれまで、オハラ家や、元はフランスの貴族であった母の実家ロビヤール家の苦難の歴史を繰り返し聞かされてきた。しかし、大農園令嬢として生まれ何の不自由もなく育ち、男たちの気を引くことが最大の関心事であった。この場面はスカーレットに、先祖たちと同じ土地への執着心が芽生えた場面である。

《アイルランド人スカーレット》

「忘れられるものか、あれは僕のもっとも大切な思いでのひとつだ——大切に育てられたアイルランドの血をひく南部の花が花開いたようだった——君はまさしくアイルランド人だ。」(195)

ミッチェルは草稿の段階ではヒロインの名前をパンジーとしていたが、不満を感じ、結局はアイルランド文学でしばしば出会うスカーレットという名を選んだという。スカーレットは、母から継いだ貴族的な優雅な風貌をたたえつつも、内面的にはアイルランド人の父ジェラルドの性格を強く受け継いでいる。ジェラルドは「故国アイルランドでも見当たらないほどのアイルランド的風貌」(30)であり、その性格は、「活力に満ち、たくましく、粗野」(31)、「騒々しくて強情」(43)、「激発しやすい」(同)ものでありながら、その下には「親切な心、いつでも思いやり深く傾ける耳、物惜しみしない性質がひそんで」(50)おり、典型的なアイルランド人として描かれる。

父そっくりのスカーレットのそのような性質をいち早く見抜き、彼女をしばしば「アイルランド人」と呼ぶレット・バトラーは、彼女を心底愛し、常にできるだけ近くにおいて彼女を見守っているながら、直接手を貸すようなことはしない。それは、スカーレットに自分の道を自分で拓いていく力があることを知っているからである。スカーレットが弱気になったり、くじけそうになるとバトラーはわざと彼女を挑発し、彼女のなかの不屈の根性を奮い立たせる。

南北戦争終結後、南軍の敗北によって、あらゆることが南部の人間にとって不利な世の中となる

なか、スカーレットはタラを守るため守銭奴と化す。戦争によってさまざまなものの価値が大きく変わった今、「土地こそはこの世でいつまでも存在するただひとつのもの……、そのために働く価値のあるただひとつのもの」と言った父の言葉が、彼女にとって唯一の真実となる。タラに不当に高い地税がかけられると、それを工面するためスカーレットは、自分の窮乏を隠したままバトラーから金を引き出そうとする。芝居を見破ったバトラーに問い詰められたスカーレットは真実を打ち明け、今度は自分自身を担保に（つまり、バトラーの情婦になることを条件に）借金を申し入れる。しかし、そのようなやりかたでスカーレットに金を手に入れさせることを好まないバトラーは、彼女にすぎなくする。そればかりかバトラーは、スカーレットのタラへの執着をアイルランドの祖先の土地への執着と同根のものとして次のように言う——「アイルランド人というのはもっとも呪われた民族だ。見当ちがいのものにひどく力を入れることが多い。たとえば、土地だ。地上の土地はほかのどこの土地とも変わりはないのに」。(583)

金を工面できなかつたうえに醜態をさらしてしまったスカーレットは意気消沈するが、バトラーに侮辱されたことを思い出すとほらわたが煮え繰り返る思いがする。こうしてスカーレットは、自分でそれと気づかぬうちに、バトラーによって生きる活力を奮い起こさせられているのである。

作者ミッチェルは、主人公スカーレットについて「祖母と自分自身とを合わせたような、あばずれ女のはげしい気性をそなえた女性」⁷⁾ にしたと述べている。熱心なカトリック信者であった母方の祖母アニー・フィッツジェラルド・スティーブンズは、婦人参政権運動家として活躍し、早世した母親にかわって長くミッチェルの世話をし、影響を与えた。

これまで見て来たように、『風と共に去りぬ』にはミッチェル自身を含め、母、祖母、大叔母、曾祖父らのアイルランド人、アイルランド性が描き込まれている。ミッチェルは作品について次のように述べている——「この本は、南部の一部の人たちが戦争と再建の時代をくぐりぬけ、社会制度や経済制度が完全に崩壊した後も生きぬくことができたのは、何のおかげだったか、ということについて書いたものです」。⁸⁾ 確かに、スカーレットの不屈の精神がアイルランドの民衆の精神に通じるものであることを考えれば、この作品は、世界中のアイルランド系移民が自らの「心のふるさと」をしのび、たどっていききっかけとなりうるものであると言っていいだろう。

(NOTES)

- 1) ジョン・セルズニックが監督してつくられた映画は1939年公開、上映時間は約3時間52分。
- 2) Anne Edwards, *The Road to Tara* (London: Hodder and Stoughton, 1983), p.16.
- 3) 両親はミッチェルにカトリックの洗礼を受けさせたが、22歳のとき自らの意志でプロテスタントに改宗した。
- 4) 松尾太郎『アイルランド問題の史的構造』(東京: 論創社、1980), p.166.
- 5) *Gone with the Wind* からの引用はすべて、Margaret Mitchell, *Gone with the Wind* (London: Macmillan and Co. Ltd., 1937) からのものとし、() 内の頁数はこの版からのものとする。
- 6) ジェラルド・オハラ之母の結婚前の名がケティ・スカーレットであり、彼はこれを長女につけた (p.55)。ス

カーレットの本名は、ケイティ・スカーレット・オハラである。

7) *The Road to Tara*, p.132.

8) *Ibid.*, p.11.

[REFERENCES]

1. T.W.Moody, F.X.Martin ed. *The Course of Irish History*, 1994 Revised and Enlarged Edition (Cork : Mercier Press, 1994)
2. Kerby Miller and Paul Wagner, *Out of Ireland The History of Irish Emigration to America* (London, Aurum Press Limited, 1994)
3. Adrian Room, *A Dictionary of Irish Place-Names*, Revised Edition (Belfast : Appletree Press, 1994)
4. S.J.Connolly ed., *The Oxford Companion to Irish History* (Oxford : Oxford University Press, 1998)
5. マーガレット・ミッチェル『風と共に去りぬ』(一)~(五)大久保康雄・竹内道之助訳 (東京 : 新潮社、1977)
6. アン・エドワーズ『タラへの道 マーガレット・ミッチェルの生涯』大久保康雄訳 (東京 : 文藝春秋、1986)
7. 有賀貞『アメリカ史概論』(東京 : 東京大学出版会、1987)
8. P.ベアレスフォード・エリス『アイルランド史 民族と階級』(上) (下) 堀越智・岩見寿子訳 (東京 : 論争社、1991)
9. 越智道雄・吉田隆志『風と共に去りぬ～スカーレットの故郷、アメリカ南部をめぐる～』(東京 : 求龍堂、1993)
10. 野村達朗『「民族」で読むアメリカ』(東京 : 講談社、1992)
11. ジェーン・ボナー・ピーコック編『マーガレット・ミッチェル 十九通の手紙』羽田詩津子訳 (東京 : 潮出版社、1994)
12. ロナルド・タカキ『多文化社会アメリカの歴史——別の鏡に映して』富田虎男監訳 (東京 : 明石書店、1995)
13. マリアン・ウォーカー『マーガレット ラブ・ストーリー』林真理子訳 (東京 : 講談社、1996)
14. 横山芳夫『歴史小説としての「風と共に去りぬ」の舞台を行く』(東京 : 近代文藝社、1996)
15. ナンシー・グリーン『他民族の国アメリカ』明石紀雄監修、村上伸子訳 (大阪 : 創元社、1997)

Re-reading *Gone with the Wind* from Irish Context

Kaoru Sato

The movie *Gone with the Wind* has been popular all over the world. Irish traits, however, were almost omitted when the original work was filmed. That is the reason many do not know the heroine is a daughter of an Irish immigrant. In the original, Irish attachment to land is described through her and her father.

The aim of this paper is to re-read the novel from Irish context, the history of government by England, emigration to America, and so on.